

教員養成学部の授業としてのピアノ実技指導

その現状と課題

*倉戸テル

Piano instruction for teacher training students: The case of Miyagi University of Education

KURATO Teru

要旨

教員養成大学である宮城教育大学では、グループレッスンという授業の形態でピアノ実技指導が行われている。将来小学校の教員、もしくは中・高等学校の音楽教員になろうとしている学生に対して、どのように演奏技能や知識を伝えているか、その現状と課題を考察する。

Key words: 初等教育教員養成、中等教育教員養成、ピアノ演奏実技指導、グループレッスン

はじめに

ピアノ演奏技術の習得は小学校教員、中・高の音楽教員になろうとする学生にとって必要不可欠であり、免許法上もそのように定められている。

平成20(2008)年告示の第8次学習指導要領、また平成29(2017)年告示の新学習指導要領では、西洋の鍵盤楽器の取り扱いなどについて特段の変更は記されていないが、このことは学習事項のなかでの位置が既に安定しており、特記すべき必要が無い事を表しているに他ならない。

筆者は2002年9月に宮城教育大学に器楽(ピアノ領域)の教科専門教員として着任した。そこで初めて知ったのが「宮教大には、個人レッスンを一切行わない」という原則がある。この考え方は1972年頃から導入されてきた(森田1986)という原則である。

教員養成学部に於けるピアノ実技指導に関する先行研究としては、山形大学地域教育大学の教員による「ピアノ教育への新たな提言」(伊達;古賀2004)がある。山形大学は個人レッスンを主体としており、この論文では個人レッスンにおける教育上の工夫が述べられている。一方、グループレッスンについての先行研

究は「「教職ピアノ実習」で育まれるピアノ演奏力：グループレッスンを通して」(神野;鈴木2018)、「「保育の表現技術」科目におけるグループレッスンと個人レッスンを併用したピアノレッスンの試み」(小栗2018)など多く有るが、これらは幼稚園や小学校教諭の養成、あるいは保育士養成を目的とした授業に関する研究で、中学校や高校の教員養成の実技指導ではない。本論文は、初等教育の教員だけでなく、音楽を専門に教える中等教育教員の養成も視野に入れ、元来は個人レッスンが基本の形であるピアノ実技指導を、グループレッスンで行うことの意義を、私が宮城教育大学において行って来た17年余りの授業を振り返ることで検証するものである。

本論文の目的

前述のようにグループレッソンの授業形態で、演奏技能、知識、音楽的経験などのレベルがまちまちである。このような多種多様な学生に対してどのような工夫を加えれば授業としてすべての学生に実りあるに指導を行うことができるのかを、これまでの実践を振り返ることで考察する。またお稽古事としてのピアノ

* 音楽教育講座

レッスンと、小学校教員および中・高等学校の音楽教員を養成する授業において必要な要素との差異についても考察を行う。具体的には1.学生定員と出講クラス、履修者数について。2.学生の実態について。3.授業の進め方について。4.課題選択の意図。以上4項目で本学のピアノ実技指導の実態を整理し、それをふまえ、5.グループレッスンの意義、として考察を行う。

1. 学生定員と出講クラス、履修者数について

筆者が宮城教育大学に着任した2002年当時、音楽を専門的に学ぶ学生は学校教育教員養成課程（以下 T 課程と呼ぶ、入学定員 8 名）、もしくは生涯教育総合課程（以下 L 課程と呼ぶ、美術と合わせて入学定員 18 名）に所属していたが、2007年の改組により、現在は初等教育教員養成課程音楽コース（入学定員 9 名）、中等教育教員養成課程音楽専攻（入学定員 8 名）のどちらかに所属している。ピアノ実技に関する授業は、初等音楽コースの独自科目で必修の「音楽基礎演習 B」¹、中等の専門科目で選択必修の「ピアノ基礎」、「ピアノ I」、そして必修では無い「ピアノ II」である。この中で「ピアノ II」は重ねて履修して良いことになっている。つまりピアノを継続して学びたい学生の履修モデルは 概ね以下の表ようになる。

表1 ピアノ関係授業の段階的履修イメージ

	初等：ピアノ以外を専門とする学生	初等：ピアノを専門とする学生	中等：ピアノ以外を専門とする学生	中等：ピアノを専門とする学生
1年次	音楽基礎演習 B	音楽基礎演習 B	ピアノ基礎	ピアノ I
2年次	ピアノ I (中等音楽免許取得希望者)	ピアノ I		ピアノ II
3年次		ピアノ II		ピアノ II
4年次		卒業研究 (ピアノ)		卒業研究 (ピアノ)

中等音楽教育の学生は、1年次にピアノの実技能力に応じてピアノ I もしくはピアノ基礎を修め、2年次

以降はピアノ II を重ねて履修することとなる。初等音楽コースの学生は必修となる音楽基礎演習 b を 1 年次で修め、継続して学びたい学生は 2 年次には中等科目であるピアノ I を、3 年次にはピアノ II を履修する事となり、両課程の学生ともにある程度の段階的な履修が行われている。また、弦楽器や管楽器、声楽などを主たる専門として学ぶためにピアノを継続して学ぶことを望まない学生は、1年次で初等「音楽基礎演習 B」、中等「ピアノ基礎」もしくは「ピアノ I」を修め、そこで大学におけるピアノ学習を終える場合もある。

初等音楽コースの特徴は、主たる専門楽器にかかわらずコースの学生全員が「音楽基礎演習 B」を履修し、小学校教員に必要とされるピアノ演奏技術や西洋の音楽的知識の基礎を習得するところにある。これに対して中等音楽教育専攻では、1年次のピアノの授業は必修であるが、主たる専攻楽器やピアノ習熟度の違いによって「ピアノ基礎」もしくは「ピアノ I」のどちらかを選択できる。これは音楽大学などにおける「専攻ピアノ」「副科ピアノ」の考え方と近いものである。

2019年度の出講クラス数は音楽基礎演習 B = 1 クラス、ピアノ基礎 = 1 クラス、ピアノ I = 2 クラス、ピアノ II = 3 クラス、全て通年の授業で合計 6 クラスである。教科教育の教員が通年 1 コマ（前期ピアノ基礎、後期音楽基礎演習 B）、非常勤講師が 0.5 コマ（後期ピアノ I b）、筆者がそれ以外の 5.5 クラスを担当している。2019年度の履修者数は音楽基礎演習 B が 11 名、ピアノ基礎が 5 名、ピアノ I a が 6 名、ピアノ I b が 8 名、ピアノ II a が 6 名、ピアノ II b が 6 名、ピアノ II c は必修の授業と時間が重なり履修者数 0、となっている。受講者数は年度によって多少の増減があるが、2007年改組後の出講クラス数の推移は以下の通りである。なお、通年開講で 1 クラス、半期は 0.5 と数える。なお、L 課程には半期授業の「演奏法（鍵盤楽器）」が出講されていた。

2007年……10.5クラス（新課程開始）

初等 1 クラス（倉戸 1）

中等 4 クラス（倉戸 2、降矢 1²、水戸 1³）←学校教育

1 「音楽基礎演習」は A 声楽、B ピアノ、C 指揮と表現、D 作曲、E 音楽学の全 5 領域、5 つの必修の授業からなっている。初等音楽コース独自の科目で、A～C は通年、D と E は半期科目である。
2 降矢美彌子教授。専門分野は音楽科教育及びピアノ、2007年度末に定年退職、後任補充無し。
3 水戸博道教授。専門分野は音楽科教育及びピアノ、2009年度末に他大学へ転出。

教員養成課程と共同開講
生涯教育総合課程5.5クラス(倉戸2.5、降矢1、水戸2)

中等7クラス(倉戸6、小畑0.5、非常勤0.5)

2008年……10.5クラス(降矢退職、新課程二年目、ピアノⅡ開始)
初等1クラス(倉戸1)
中等+L課程9.5クラス(倉戸5.5、水戸3、非常勤1)

2009年……11.5クラス
初等1クラス(倉戸1)
中等+L課程10.5クラス(倉戸5.5、水戸4、非常勤1)

2010年……10クラス(水戸退職、小畑1月着任)
初等1クラス(倉戸1)
中等+L課程9クラス(倉戸6、非常勤2、小畑1⁴⁾
※3クラスを非常勤が担当、小畑が着任後引き継ぐ。

2011、2012……8クラス(T.L課程の学生概ね卒業)
初等1クラス(倉戸0.5、小畑0.5)
中等7クラス(倉戸5、小畑1.5、非常勤0.5)

2013～2017……7クラス
初等1クラス(倉戸0.5、小畑0.5)
中等6クラス(倉戸5、小畑0.5、非常勤0.5)

2018……8クラス
初等1クラス(倉戸0.5、小畑0.5)

2. 学生の実態について

演奏実技に関しては、入学試験と卒業研究が重要である。宮城教育大学の入学試験では初等、中等の課程ともに演奏試験を課している。内容は「器楽(日本の楽器を含む)又は声楽により、演奏する能力をみる。演奏する曲目は任意とし、演奏時間は1人数分程度とする」(2020年度入学者選抜要項)となっている。これは筆者が着任した2002年から基本的に変わらない。このほかに歌唱教材程度の曲の弾きうたいの試験が課されてはいるものの、演奏試験ではすべての受験者がピアノ曲を弾くわけではない。参考までに2019年度入試の演奏試験での楽器選択状況は以下の表2の通りである。

表2 2019年度入試、演奏試験での楽器選択状況

	初等	中等
前期	ピアノ6、声楽3、フルート1、ヴァイオリン1、エレクトーン1	ピアノ7、クラリネット3、声楽3、フルート2
後期	ピアノ12、声楽6、フルート3、クラリネット3、サクソ1、エレクトーン1	中等は前期まとめ取りのため、後期入試は実施せず。

また、4年次に行う卒業研究の分野は表3のように実技(A、B)、作曲、論文に分かれている。

表3 卒業研究の区分 音楽教育講座「卒業研究の手引き」平成27年度改訂(現行版)

区分	内容	提出物等	試験等
実技	A. 卒業研究題目を実技内容とする ・ピアノ、声楽、管弦打楽器、指揮 ・演奏曲目に関連するレポート(楽曲分析を含むこと)	レポート (8000字程度)	演奏試験(15分程度) レポート発表および試問
	B. 卒業研究題目を論文内容とする ・音楽全般、音楽学、音楽教育学等の研究 ・ピアノ、声楽、管弦打楽器、指揮	論文 (16000字以上)	演奏試験(10分程度) 論文発表および試問
作曲	卒業研究題目を作品内容とする	関連論文 (16000字以上)	作品発表 論文発表および試問
論文	・音楽全般、音楽学、音楽教育学等の論文 *音楽関係の調査(例:学校現場での伝統芸能の伝承、コミュニティの音楽活動の調査)、音楽・教育実践とその報告(例:音楽療法のセッション、小学校でのボランティア指導、コミュニティの音楽活動の指導)なども可。	論文 (24000字以上)	論文発表および試問

4 小畑千尋准教授。専門分野は音楽科教育及びピアノ、2011年1月着任。

本学音楽教育講座の特徴は入学試験において選択した演奏内容と、卒業研究の内容は違っても構わない点にある。学生によっては入学試験ではピアノを演奏したが、卒業時は声楽や作曲、論文を選択する場合もある。勿論、入学試験から首尾一貫して1つの楽器を学び続ける学生もいる。2019年度の卒業研究区分の選択状況は以下の通りである。実技 A = ピアノ 6 名、フルート 2 名、クラリネット 1 名、サクソ 1 名、テューバ 1 名、声楽 1 名、実技 B = 0 名、作曲 = 2 名 論文 = 6 名。

ここまで述べてきた入学試験および卒業研究の内容は、学生のピアノ演奏に関する習熟度、学習意欲に大きな差があることを示している。学習状況の観察や学生からの聞き取りによると、演奏技術をより深く専門的に学ぶ事を目的にして入学しているものもいれば、教員になることが最大の目標で、その為の「手段」として音楽を選び入学してくるものもいて⁵、その演奏技術の習熟度や学びの熱意は様々である。

3. 授業の進め方について

上述のように現在のクラス人数は5名から11名程度である。学生の他の授業等との兼ね合いで履修しやすいコマに集中してしまうことが多い。かつては1クラス15名以上の登録者が居たケースもあるが、1回の授業時間90分を15名で割ると1名あたり6分しか割り当てられないことになり、授業として成立させることが非常に困難であった。

授業はグループレッスンではあるが、基本的に履修者一人一人の習熟度や授業時間外の練習など、それぞれのレベルや特性に合わせた課題や進度にするよう留意している。基本となる授業内容、授業計画の一例として、2019年度火曜日に開講されている「ピアノ I b」の初回に学生に配布した授業計画表を表4に示す。表の下に記されている4つの留意事項までを印刷して受講生に配布している。

- 専門的なピアノ経験が必要な授業です。また、十分な準備、練習をした上で、授業にのぞんでください。難易度の高い曲を不完全に演奏する事よりも、平易

表4 授業計画(ピアノ I b)

4月9日		ガイダンス
4月16日	レッスン	スケール及び練習曲
4月23日	レッスン	同上
5月7日	クラス発表会	スケール、練習曲
5月14日	レッスン	練習曲、バッハ
5月21日	レッスン	同上
5月28日	レッスン	同上
6月4日	レッスン	同上
6月11日	クラス発表会	同上(暗譜で演奏)
6月18日	レッスン	古典派の楽曲
6月25日	レッスン	同上
7月2日	レッスン	同上
7月9日	レッスン	同上
7月16日	レッスン	同上
7月23日	試験	同上(暗譜で演奏)

な曲でもきちんと仕上げる事を学んでください。

- 出席について
遅刻は3回で欠席1回と見なします。
- 取り上げる楽曲について
 - 1 スケール・アルペジオ(ハノンより)
 - 2 練習曲(チェルニーなど)
 - 3 バッハ:平均律クラヴィーア曲集、インベンション、シンフォニアなど
 - 4 以下の古典派の楽曲より各自の能力に応じた楽曲
 - a スカルラッティ:ソナタ
 - b ハイドン:ピアノ・ソナタ
 - c モーツァルト:ピアノ・ソナタ
 - d ベートーヴェン:ピアノ・ソナタ
 - 5 ロマン派以降の楽曲を含めた自由曲(後期)
 - 6 連弾など(後期)
- 評価について 授業での演奏、クラスでの発言内容、クラス発表会、試験により評価します。

5 特に初等音楽コースの場合に「手段」として音楽を選ぶ学生が見られる。専門性が高い音楽教育専攻の学生にはこのような学生はほとんど見られない。

以下に、表4に基づいて、それぞれの回で取りあげる楽曲について解説する。初回の授業(ガイダンス)ではそれぞれの学生に、これまでの鍵盤楽器の演奏経験、受けてきたレッスン内容等をヒアリングし、克服すべき事柄や目標を設定する。次の3回の授業ではスケール・アルペジオを取りあげる。表に示したスケールとは、具体的にはスケール・アルペジオの事で『ハノン』という基本的な練習曲集を用いる。スケールは各調で音階の上行形と下行形を4オクターブの幅で弾き最後に和音で終止形(カデンツ)⁶を演奏する。アルペジオは各調の主和音、すなわちドミソドの分散和音の形で、スケールと同じく4オクターブ幅の上行下行形を演奏する練習である。平行して行う練習曲はそれぞれ受講者のレベル、抱えている技術的課題にあわせて曲を決めてその克服を目指す。取りあげる曲は『チェルニー 30番練習曲集』『ショパン練習曲集作品10、25』など幅広い選択肢の中から選ぶ。

次に取りあげるバッハの作品は受講生の実技能力に応じて、「平均律クラヴィーア曲集」、「インベンション」、「シンフォニア」などから曲を選択する。バッハの作品は、多声で書かれている音楽のとらえ方、それぞれの声部が独立して聞こえるように演奏するための技術、それぞれの声部を聴き分ける力を養うために、重要なものである⁷。以下、バッハ自身が『インベンションとシンフォニア』の曲集の巻頭に寄せている言葉を引用する。

「誠実なる指導、これによってクラヴィーアの愛好家、なかんずく、特に勉強を希望する者たちに、1)二つの声部を純粋に演奏することを学び、さらに上達した人たちには、2)三つの声部を正確かつ適切に処理することを学び、それによって何よりもカンタービレに歌う奏法を達成して、それと合わせて作曲する事への事前の強い関心呼び起こすことに至る、明確な方法が示される。」(バッハ1723: ii)

前期の残り6回では古典派の楽曲を取り上げる。ここではハイドンやモーツァルトなど作曲家のソナタ形式、もしくはロンド形式の楽曲を取りあげる。

ここまで前期の15回で取り上げる内容は、ピアノを演奏する上で必ず手に入れておくべき基本的な事柄であり、学校現場で必要とされるピアノ演奏にも直結するものである。

後期は応用編としてロマン派や近現代の楽曲などの自由曲を取りあげる。また、連弾や2台ピアノのピアノだけで行う合奏、そして歌曲、合唱曲や器楽曲の伴奏なども取り扱っている。

4. 課題選択の意図

ここでは、前項で示した半期の授業課題について、授業者の課題選択の意図を記す。

スケールやアルペジオ、そして練習曲では確実な打鍵、左右10本の指がそれぞれ独立して思い通りに動くこと、指をくぐらせることや返すことを含めて動きや、打鍵の強さ、音色を自在にコントロール出来る基礎的な技術を習得する。これによりどのような状態の楽器であってもしっかりと音を鳴らし、思い通りの演奏を行う事が出来る能力を手に入れられる。これはピアノという楽器ならではの課題を含んでいると考える。ヴァイオリンやクラリネットなど、他の多くの楽器では、演奏者自身が所有する楽器を練習でも本番でも演奏するが、ピアノの場合には、その時々で演奏する楽器(個体)が変わる。例えば、演奏するピアノがアップライトピアノなのかグランドピアノなのかによって、弦をたたくアクションのシステムが異なっているため、必要になる技術は大きく違う。たとえ同じ機種であったとしても、楽器の個体によって、また楽器が置かれている部屋の状態や使用頻度などにより楽器のコンディションは大きく違うものである。コンサートホールのように温度湿度の管理が徹底していて、調律など手厚く管理されている楽器とは違い、学校現場にある楽器は、鍵盤の動きの重さ、音の出やすさ、音の高低による鳴りムラなど、本当に千差万別である。また学校現場では多くの楽器は予算不足等の理由から、保守状態は劣悪である。どのような状態の楽器であっ

6 『ハノン』では、T.(トニック)、S.(サブドミナント)、D.(ドミナント)、T.(トニック)の順に機能和声が行進し、調性を強く意識させる終止形が用いられている。

7 近頃の学生の中には、入学前にバッハの作品の演奏経験が全くない者も増えている。そのため、授業の中でバッハの作品を取りあげることは不可欠である。

でもそれをコントロールし、演奏者の意図通りに演奏できるためには、基本的な技術の確かさが非常に重要となる。また、ハノンでは様々な調性のスケールとそれに付随しているカデンツを演奏することにより、調性の感覚と機能と和声の基礎に対する感性を習得できる。

バッハの作品は、多声部を聴き分け、弾き分ける能力を養うために課題としている。特に聴き分ける能力は、ピアノの演奏にとって必要なだけでなく、学校現場において合唱指導を行う際に必要となる能力である。児童生徒が上手く演奏できていないときに問題となる声部を的確に指摘できる耳をもつこと、そして音楽的に重要な声部を理解し、それをふまえた上で授業での指導を行うことは音楽教員にとっての大切な能力である。

古典派の楽曲では、授業の最初で身につけたスケールとアルペジオ、練習曲で達成した技術を実際の曲の中でいかに表現と結びつけて演奏するかを学習する。メロディーと伴奏の弾き分け、フレーズを表情豊かに演奏するための方法を習得する。またソナタ形式やロンド形式などの楽曲の形式に対する理解を深めること、それを演奏表現に昇華することを目指す。上記作品は形式のみならずフレーズや和声の造りなども含めて西洋音楽の基本的な様式に基づいているため、様式の理解をしたうえでの演奏実践を行うことの課題として最適と考える。古典派の楽曲の学習により、様式感を伴った演奏が出来るようになることを目指す。加えて、様式感を身につけることは学校現場での鑑賞や創作の授業内容についても、大いに役立つ。鑑賞については説得力のある題材選択や実体験を伴った解説を行うことが出来、創作については西洋音楽の様式をふまえた上での自由な創作を行わせることが出来る。様式感に基づく演奏能力は、音楽の授業を充実したものにするために、重要なものである。

後期に連弾や合奏、合唱伴奏を取りあげるのは、さらなる演奏技術の獲得のためである。それと同時に、教員になったときに必要不可欠である合奏、伴奏の能力を身につけるためでもある。合奏、伴奏の能力とは、自分が演奏するパート以外の楽譜を読み込み、楽曲を分析し、どの音、あるいはどの和音やフレーズを強調するとよいか、もしくは控えめにするとよい演奏になるかを実践する事で培われる。また、一人で演奏する

機会が圧倒的に多いピアノ学習者が合奏をすることにより、演奏中に音や音楽を使って会話する能力を獲得することが出来る。演奏とはテンポ、音量、表現など毎回少しずつ違ってくるものである。演奏者同士が音を通じて、どのような演奏、表現を行いたいのかを、互いに主張し、また聴きあう事を通じてコミュニケーションを取りながら、一期一会の演奏を作り上げていくことが大切なことであり、生演奏の醍醐味である。学校現場においても、児童生徒の演奏に教員が即座に反応し、必要な時にはリードしながらより良い演奏体験に導くことが肝要である。このことはCD等の音源を用いた合唱や合奏指導、ICT教材では成し得ることが難しく、音楽科教員の存在意義であると言えよう。

5. 考察：グループレッスンの意義

冒頭に記したように、本学では筆者の着任前からグループレッスンを基本として授業を行って来た。これはなぜなのであろうか。ここでは筆者が自らの教授経験に基づいて考えるグループレッスンのメリットとデメリットについて考察をおこなう。

グループレッスンの良い点は、第一に、自分が演奏しない曲についても知ることが出来ることである。多様な楽曲を知ることは、音楽史や時代様式についての知識などを実体験を伴って理解することにつながる。第二に、クラスメイトの演奏を毎回聴くことにより、客観的に演奏の善し悪しを判断できる聴く力を育てられることである。第三に、毎回の授業でクラスメイトの前で演奏し、それぞれの課題について概ね月1回の「クラス発表会」を行う事により、緊張した状態での演奏経験(本番)を多く積むことが出来る。これらのグループレッスンのメリットは、教員養成大学の授業に限らず、ピアノの講習会や公開レッスンなどにも共通して言えることである。さらに、筆者が教員養成大学のグループレッスン授業ならではの事として意識していることは、授業の中で受講者に演奏についての発言や意見を求めることである。自身やクラスメイトの演奏について積極的に意見を述べたり、またディスカッションを行うことは、音楽や演奏の中身などについて語る言葉、すなわちボキャブラリーを多く獲得することにつながる。このことは聴く力の獲得と共に、将来音楽の授業者になる学生にとっては必要不可欠な

ことと考えている。

問題点は、一人あたりのレッスン時間が少なくなってしまうことに尽きる。技術的に難しい所や、フレーズ表現の仕方の習得などは、繰り返しその場で行う練習が効果的であるが、グループレッスンでは、そのような練習を時間を使って授業の中で行うことが難しい。練習は「量より質」と言われることが多いが、同時に「量こそが質の向上に必要」ということもまた真実である。また、個人レッスンであれば、受講生が教員の要求する水準をクリアしていれば、さらなる高い演奏水準を目指して指導を行うことができるが、グループレッスンの場合には、時間に追われた状況だと、課題をクリアしたところで次の受講生に順番を回さざるを得ないことが多い。そのため、能力が有り、準備を入念にしてきた受講生ほど指導を受ける時間が短くなっていく傾向がある。以上のような問題点を鑑みて、筆者は卒業研究指導では個人レッスンを行うことにしている。

ここまで、本学で行ってきたピアノ演奏実技のグループレッスン授業について述べてきたが、最後に教員に必要とされる力量についても触れておきたい。先に述べてきたように学生の属性、学習経験や意欲、克服すべき課題はまちまちである。ピアノ曲の数は限りなくあり、学生達が授業で演奏する曲もまさに千差万別である。グループレッスンの授業者は、それぞれの楽曲についての特徴や知識として知っておくべき事を受講生に話し、学生の演奏について良いところと克服すべき課題を聴き取り、瞬時にどの課題を解決すべきかの優先順位を判断し、学生の現状の半歩あるいは一歩先の目標を示しながら課題解決の方法を指示し、自らが模範演奏を行うことが必要になる。以上のことを授業の中で臨機応変に行うためには、範奏するための演奏能力はもとより、幅広い音楽知識と、それを言葉で伝える能力が必要となる。筆者が日頃特に苦心しているのは、時間の制限が有るなかで、多くの伝えるべき事の中から、いま何を伝えるかの優先順位を判断することである。

おわりに

本研究のために、17年余りの本学における授業の振り返りをおこなった。このことにより筆者自身も教員

養成大学の学生が身につけるべきピアノ演奏技術や知識、その為に授業で扱う楽曲を選んだ意図など、あらためて整理する事が出来た。以上のことは、これから本学が行う学部改組などの改変において、学生達が身につけるべき技術や知識、授業で伝えるべき事を見失わないために大変に有意義だったと考える。

今後は、授業者の意図や実践が、学生にどのように伝わり、ピアノ演奏能力がどのように育成され、それが学校現場でどのように生かされているのかを、本学が学生に対して行っている授業評価アンケートの分析や、卒業生への聞き取り調査等について行っていきたいと考えている。

謝辞

本論文を執筆するにあたり、大変にお忙しいなか様々な面からの確かなアドバイスをくださった本学音楽教育講座の同僚、小塩さとみ教授に心から感謝いたします。ありがとうございました。

文献

- バッハ (Bach J.S.) 1723 『インベンションとシンフォニア曲集』
“Inventionen und Sinfonien BWV 772-801” 園田高弘 (訳)
 2009 東京：春秋社。
- 伊達華子；古賀望子 2004 「ピアノ教育への新たな提言」、『山形大学紀要 (教育科学)』13 (3) 号 :215-225。
- 神野すなほ；鈴木由紀子 2018 「「教職ピアノ実習」で育まれるピアノ演奏力：グループレッスンを通して」、『洗足学園大学教職課程年報』2：101-114。
- 森田稔 1986 「音楽科カリキュラムの概要」、『小学校教員養成課程における専門科目「音楽」の内容と方法に関する実践的研究、宮城教育大学音楽科』:1。
- 小栗祐子 2018 「「保育の表現技術」科目におけるグループレッスンと個人レッスンを併用したピアノレッスンの試み」、『東海学院大学研究年報』3:79-88。

(令和元年9月27日受理)

